
甘藍

吉野華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘藍

【Nコード】

N5043E

【作者名】

吉野華

【あらすじ】

アレックス少年はどうやら虫が好きらしい。「伯爵の恋人」の番外編。時系列としては1章以前。

ある新緑の午後、四階テラスでカイトが手すりに寄りかかりながら嘆いていた。何だかよく分からないが、騎士仲間に恋人ができたとかで、動揺しているようだった。

友だちがいけないことの利点には、こういうときに焦らなくていいということがあると思った。僕は僕の腹心の騎士ということになっているこの男のことを、ほとんど鬱陶しいと思っていたが、こういうときはなおさらだった。

「まあ、そんなにがつくり来るほどのことじゃないと思うよ」

僕は別にカイトのことなんて全然興味がなかったが、落ち込んでいるようなので一応声をかけた。

するとカイトは手すりに両肘をかけたまま、顔だけ僕に向けた。

「アレックス様はまだ十四だからそういうことがおっしやれるんですよ。でも俺はもうじき成人するんですよ」

「馬鹿馬鹿しい。女なんか、僕は要らないよ。あいつら煩いんだ。すぐ泣くしさ。」

タティだってそうさ。僕の話を楽しそうに聞いていたと思ったから、手に青虫を乗せてあげたんだ、キャベツの葉にいたやつを。そして本気でひっくり返っちゃったんだよ。だったら虫が好きみたいな顔してなきゃいいのに。

拳句に今日はずっとアレックス様なんか嫌いなんて言って泣いてるしさ。謝っても泣きやまないし。タティは泣き虫だ。女なんて、話を通じないんだ」

「青虫……、なんてことを。アレックス様は意外と苛めっ子なんですネ」

「違うよ」

「そうですか。ああ、毛虫は駄目ですよ。腫れるから」

カイトは手すりに頼杖をついて、ちょっと苦笑いをしているようだった。

「知ってるよ。でも大丈夫なものいるよ」

「アレックス様は、虫がお好きなんですね」

「うん」

「じゃあそれは嫌がらせではなく、アレックス様としては、好きなものをあげたってわけですか。タティと虫の楽しさを共有したかった？」

「うん、そうなんだ」

ふとカイトは、僕ににやりとした。

「ま、と言って、女の手に乗せるような暴挙をなさってるうちは、貴方も当分女にや縁はないでしょうけどね」

「蛙に乗せたときは、ぎゃーって言ってた」

僕は言った。

するとカイトは再び不審そうに眉間を寄せた。

「アレックス様、貴方やつぱり結構その……。貴方、実はタティがお好きなんじゃないんですか？ 彼女の気を惹きたいんですか？

もしそうなら、あんまり無茶はやらないほうがいいですよ。北風と太陽の話、知ってますか？」

「蛙をあげたのはジェシカだよ。庭園の紫陽花のところにいたアマガエルをね」

「ああ…、そうですか。そりゃまた。」

ところでアレックス様の極めて限定的な交友関係からすると、やっぱり閣下にも虫か何かあげたりしたんですか？」

「カイトに黄金虫をあげたとき、別に反応なかったから、男はつまらないと思ったんだ」

「ん、とするとやっぱり貴方、ちょっとは相手のリアクションを期待してるんですか」

「でも一応兄さんの執務机に置いてあげたんだ」

「何をですか？」

「ダンゴ虫」

「閣下はどうしました？」

「踏み潰した。それから怒られた」

「ああ、やっぱりね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5043e/>

甘藍

2011年2月1日03時36分発行